

被災地派遣レポート〈第35回〉

総務局人事部人事課 田邊 真琴さん

■現地での活動内容

4月10日(日)から4月14日(木)までの5日間、宮城県派遣第3陣第1班として、班員10名体制により、宮城県南三陸町立志津川中学校避難所で支援活動にあたった。

現地での主な活動内容は、志津川中学校避難所の全般的な運営支援・サポートであった。志津川中学校は町の高台に位置しており、津波に飲み込まれ壊滅状態となった町の様子を一望できた。われわれは志津川中学校3階にある教室の一室を派遣期間中常時使わせていただき、班員はそこで食事・着替え・寝泊りを行った。電気・ガス・水道などのライフラインは全て止まった中での活動である。具体的な活動としては、以下のとおりである。

- ① 救援物資が運び込まれた際に、職員が列になりバケツリレー形式で物資を中学校のホール(救援物資保管場所)に搬入する。
- ② 避難所の方や、外から救援物資を求めてこられる被災者に対して、必要とする物資を提供するとともに、他の避難所から物資が不足しているとの連絡があれば随時搬出する。物資は食料品から洗剤、毛布などの日用品、衣料品まで様々である。特に、徐々に暖かくなってきた時期であり、冬物から春物への衣替えのため、衣料品の需要が大きかった。
- ③ 中学校の校舎内や玄関口の清掃作業。手が空いた際に随時行う。
- ④ 生活用水を、常駐する自衛隊の給水車から小型のポリタンクに詰め替える。
- ⑤ 暖房用の灯油ストーブに使用する灯油を、ドラム缶からポリタンクへ詰め替える。
- ⑥ 炊き出しの準備の手伝い。

■志津川中学校で印象的だったこと

志津川中学校避難所は、地域コミュニティ(自治会)が中心となって運営されていた。毎日、朝と夜には、「部屋長会議」が行われ、避難所全体を統括する自治会長、避難者の居住する各教室の代表者、役場職員、中学校教員、自衛隊、医療班、そしてわれわれ都職員の代表者が集まり、連絡事項を伝え合う。また避難所の中で少しでも困ったことがあればそこで相談していく。避難所にいる全員が情報共有を図ることができ、不都合や要望にもその都度対応できていた。他の避難所ではノロウイルスが発生したという情報もあったが、志津川中学校避難所では清掃・石鹸での手洗い・アルコール消毒をみんなで呼びかけ、一人ひとりが徹底することで、衛生状況が良好に保たれ、幸いにもノロウイルスは発生しなかった。また、避難者の方自身も当番制で避難所の清掃やトイレ掃除などを行っていた。

地域コミュニティが中心となって避難所を運営し、避難所の一人ひとりにそれぞれの役割分担があったため、お互いがお互いを支えあう体制ができ、避難所全体が非常によくま

とまっていた。

■現地での活動を通して

われわれより先に派遣された陣からすでに現地の人と良好な関係ができていたため、現地に到着したときから現地の人からは好意的に接してもらうことができた。われわれ班員は、朝の日課として避難者の方々と一緒にラジオ体操をし、挨拶を交わし、朝食後に活動を始めるというように、避難者の方々と同じ生活を送っていた。また、避難所の部屋長会議に参加し避難所の運営にも関わっていた。また、現地の方に不快感やストレスを感じさせないように言葉や態度、行動には十分注意しながらも、現地の人と積極的に挨拶を交わしコミュニケーションをとることで避難者との親睦を深めることを心がけた。

現地での活動最終日、避難所内各所に挨拶回りをした際には、多くの避難者の方々から感謝の言葉をいただき、われわれがバスで現地を出発する際には、笑顔で見送っていた。また、先日10月4日に、志津川中学校の3年生と先生方が修学旅行で東京に来られた際には、都庁に来訪され、都の派遣業務に対してのお礼と、最近の中学校の状況などを撮影した手作りの写真集などを頂いた。同じ避難所の中で寝泊りし、同じ生活を送りながら支援活動を行っていたこともあり、われわれと現地の人との距離は近く、身近に接していただくことができたのだと思う。

避難所の方々は、外からやってくる者に非常に敏感になっており、新たに避難者を受け入れることも慎重に対応していた。避難所内の良好な環境を保つためなのだと思う。全国各地からやってくるボランティアやわれわれ都の派遣職員も入れ替わり多くの方がやってくるため、そのような外部からの干渉に被災者の中にはストレスに感じることもあるのではないだろうか。被災地での活動は、支援する側からの一方的なものではなく、現地の人と同じ目線で考え、感じ、行動することが大切なのだと思う。

派遣当時から、われわれの現地での活動が、どのように受け止められ、どの程度力になれたらろうかという思いはあった。しかし、今振り返ってみると、避難所の方々から感謝の言葉や笑顔をいただくことができたのは、われわれの活動が現地の人に少なからず受け入れられ、被災地支援の一助になれたのだと実感している。